

特別企画 工学部長・学長等会議
「国際連携教育に関わる活動・取組について」

国際協働教育を基軸とした 地域の国際化の推進



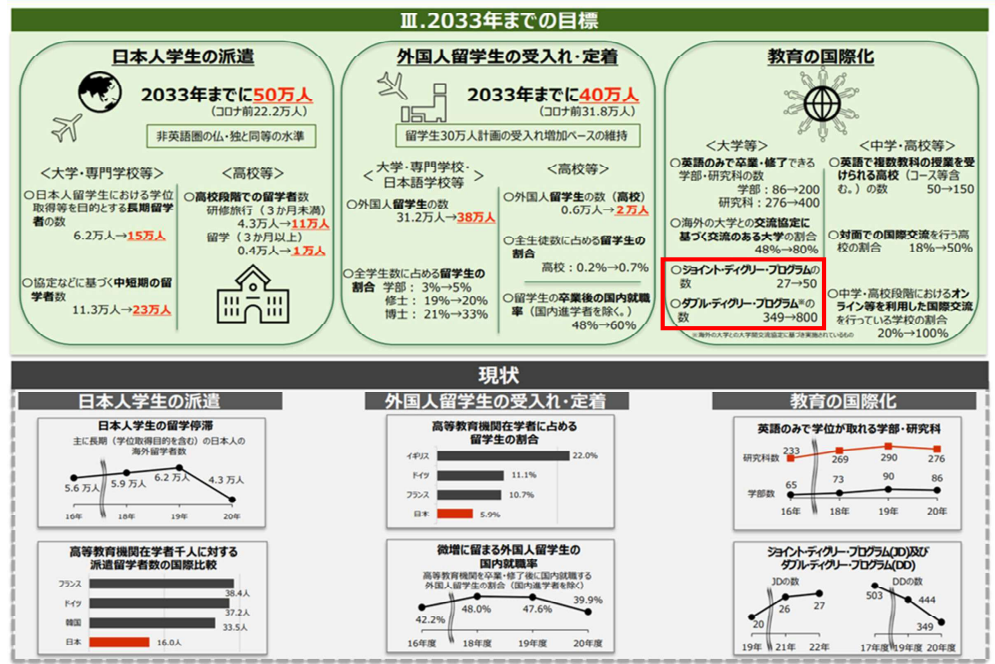
リム・リーフ



第5回岐阜大学フォト&アートコンテスト 受賞作品 https://www.gifu-u.ac.jp/about/publication/photo_art_contest/05.html



教育未来創造会議第2次提言「未来を創造する若者の留学促進インシアティブ(J-MIRAI)」 <https://www.cas.go.jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/230427gaiyou.pdf>



本学の国際協働教育プログラムについて

1

国際連携の発展段階でいうと、一般的には

1. 交換留学
2. 共同研究
3. コチュテル(Cotutelle; 共同指導)
4. ダブル ディグリー プログラム(DDP) 学位2つ
5. ジョイント ディグリー プログラム(JDP) 学位1つ(共同学位)

という順で発展していくことが多い

なぜ地方国立大学がJDPに挑戦したのか

人材育成・地域連携・産学連携へどうつながったか

本学のジョイント ディグリー プログラム(JD専攻) 3

専攻名	学位
自然科学技術研究科 岐阜大学・インド工科大学グワハティ校 国際連携食品科学技術専攻	修士
連合農学研究科 岐阜大学・インド工科大学グワハティ校 国際連携食品科学技術専攻	博士
工学研究科 岐阜大学・インド工科大学グワハティ校 国際連携統合機械工学専攻	博士
工学研究科 岐阜大学・マレーシア国民大学 国際連携材料科学工学専攻	博士



これまでの修了生31名
(R7.9.30現在)

※相手大学を主大学とする学生含む

- ・岐阜大学は全国大学JDP協議会会長校
- ・東海国立大学機構は11プログラムを運用している(全国で31)

本専攻の教育課程期間は3年間を標準とする。在籍期間のうちの約1年を副大学に滞在する。4月から本JDプログラムでの修学を始めるものとする。
研究指導は主大学及び副大学で行われる。各学生に対し両大学から「共同指導教員」を置き、実質的な研究指導を行う。
各学生に対し岐阜大学とUKMの双方の教員で組織される「学生指導委員会」により、客観的な研究進捗確認と指導を行う。

学期	1st	2nd	Break	3rd	4th	Break	1st	2nd	Break	3rd	4th	Break	1st	2nd	Break	3rd	4th	Break		
開始月	4月	6月	8月	10月	12月	2月	4月	6月	8月	10月	12月	2月	4月	6月	8月	10月	12月	2月		
岐阜大学 入学生	岐阜大学において履修と研究					UKMにおいて履修と研究					岐阜大学において履修と研究					UKMにおいて履修と研究				
UKM 入学生	UKMにおいて履修と研究					岐阜大学において履修と研究					UKMにおいて履修と研究					UKMにおいて履修と研究				
共同指導 教員	決定 																			
学生 指導 委員会	発足 																			
特別研究 特別演習	DPP	BPR		BPR	APR		BPR	BPR		BPR	APR		BPR	BPR		DSR 執筆	論文 審査	修了		
合同 学位審査 委員会																	発足 			

DPP (ディサテーション プロジェクト プロポーザル) 学生は研究開始時に研究の背景を体系的に理解し、研究提案を行う。
BPR (バイマンズリー プロGRESS レビュー) 学生は研究の進捗を指導教員に報告し、問題点や今後の計画などを話し合う。
APR (アニュアル プロGRESS レビュー) 学生は1年に1度、学生指導委員会において研究の進捗を報告し質疑応答を行う。
DSR (ディサテーション シノプシス レビュー) 学生は学生指導委員会において研究成果及び論文の公表状況などについて発表、質疑応答を行う。
DSRにおける学生指導委員会での審査を経て、博士論文提出の可否が決定される。

共同指導教員の構成員は以下である。
1. 共同指導教員1 (主大学)
2. 共同指導教員2 (副大学)
3. 共同指導教員3 (主大学) (必要に応じて設定)

学生指導委員会の構成員は以下である。
1. 委員長 (主大学教員)
2. 共同指導教員1 (主大学)
3. 共同指導教員2 (副大学)
4. 共同指導教員3 (主大学) (必要に応じて設定)
5. 専攻内の教員 (主大学)
6. 専攻内の教員 (副大学)
7. 他専攻の教員 (主大学)

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/docs/zairyohakase.pdf>

履修モデル

主大学 = 岐阜大学					
1年目 於岐阜大	形態	科目名	単位	開講	
必修	特別研究	ディサテーションプロジェクトプロポーザル	1	共同	
必修	特別研究	特別研究	(1)	共同	
必修	特別演習	アニュアルプロジェクトレビュー	(1)	共同	
必修	特別演習	バイマンズリープロGRESSレビュー	(1)	共同	
選択		(科学技術実践科目より1科目)	1	岐阜大	
選択	講義	(専門科目群より2科目)	2	岐阜大	
2年目 於UKM	形態	科目名	単位	開講	
必修	特別研究	特別研究	(1)	共同	
必修	演習	アニュアルプロジェクトレビュー	1	共同	
必修	演習	バイマンズリープロGRESSレビュー	(1)	共同	
必修	学外研修	JDインターンシップ	1		
必修		リサーチ ディセミネーション	1		
3年目 於岐阜大	形態	科目名	単位	開講	
必修	特別研究	ディサテーションシノプシスレビュー	1	共同	
必修	特別研究	特別研究	1	共同	
必修	演習	バイマンズリープロGRESSレビュー	1	共同	

主大学 = UKM					
1年目 於UKM	形態	科目名	単位	開講	
必修	特別研究	ディサテーションプロジェクトプロポーザル	1	共同	
必修	特別研究	特別研究	(1)	共同	
必修	特別演習	アニュアルプロジェクトレビュー	(1)	共同	
必修	特別演習	バイマンズリープロGRESSレビュー	(1)	共同	
選択	専門科目	リサーチメソッドロジー	4	UKM	
2年目 於岐阜大	形態	科目名	単位	開講	
必修	特別研究	特別研究	(1)	共同	
必修	演習	アニュアルプロジェクトレビュー	1	共同	
必修	演習	バイマンズリープロGRESSレビュー	(1)	共同	
必修	学外研修	JDインターンシップ	1		
必修		リサーチ ディセミネーション	1		
選択		(科学技術実践科目より1科目)	1		
3年目 於UKM	形態	科目名	単位	開講	
必修	特別研究	ディサテーションシノプシスレビュー	1	共同	
必修	特別研究	特別研究	1	共同	
必修	演習	バイマンズリープロGRESSレビュー	1	共同	

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/docs/zairyohakase.pdf>

カリキュラム

種別	科目群	科目名	単位	開講年	開講場所
必修	特別研究	ディサテーション プロジェクト プロポーザル	1	1	共同
必修	特別研究	ディサテーション シノプシス レビュー	1	3	共同
必修	特別研究	特別研究	1	1~3	共同
必修	特別演習	アニュアル プロGRESS レビュー	1	1~2	共同
必修	特別演習	バイマンズリー プロGRESS レビュー	1	1~3	共同
必修	科学技術実践科目	JDインターンシップ	1	1・2・3	岐阜大
必修	科学技術実践科目	リサーチディセミネーション	1	1・2・3	岐阜大
選択	科学技術実践科目	(科学技術実践科目群から1科目)	1	1・2・3	岐阜大
選択	専門科目	(専門科目群から2科目選ぶ)	2	1・2・3	岐阜大
修了要件:10単位 (必修科目7単位+選択科目3単位=10単位)					

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/docs/zairyohakase.pdf>

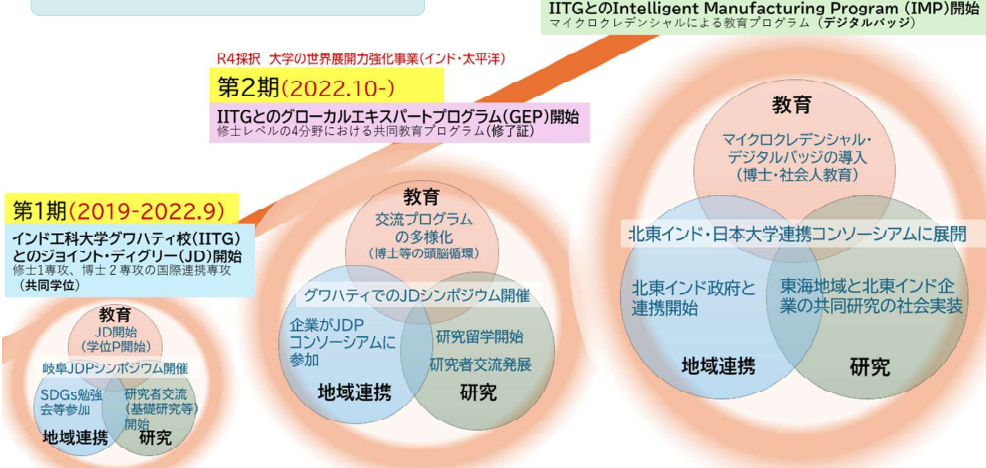
項目	Cotutelle	Double Degree (DD)	Joint Degree (JD)
対象	個別学生	プログラム	プログラム
主な目的	共同指導	2つの学位取得	共同学位取得
指導体制	両大学の教員が共同指導	両大学で履修・研究	共同カリキュラム・共同指導
取得学位	通常1学位+共同指導証明	2つの学位	1つの共同学位
学位記	1枚	2枚	1枚(両大学名記載)
制度構築	学生ごとの協定	大学間協定	大学間協定+認可等
導入難易度	★	★★	★★★

岐阜大学・インドの交流の変遷

8

「大学の国際化の推進とその成果の地域還元」を目指し、国際性の高い教育プログラムであるジョイント・ディグリープログラム(JDP, 国際共同学位)で構築した国際的な大学・地域間連携を、人材育成および産業振興につなげる。

【J-MIRAIへの貢献】



東海企業のインド進出・地域企業国際化への波及

○東海・北東インドを中心とする企業・自治体・政府機関の交流



●インド開催 JDPシンポジウム
2022年度から毎年開催
SDGsや脱炭素に関する議論や学術発表

参加者：150名程度
*参加企業・団体数
日本の企業・団体：6～10社(10名程度)
インド企業・団体：5～15社(15名程度)

●岐阜開催 JDPシンポジウム
2022年度から毎年開催
産官学金連携セッション・学術セッションを実施

参加者：300名程度
*参加企業・団体数
日本の企業・団体：約25社(30名程度)
*IITG教員・学生等：20名程度参加



地域で働く国際人材の育成

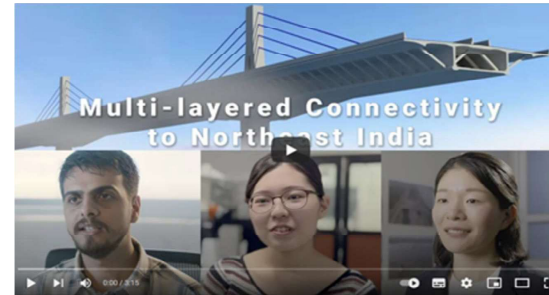
9

日本政府の広報動画に採用(2024/3/27公開)

政府広報YouTube動画(内閣府政府広報室)

“Multi-layered Connectivity to Northeast India”

“インド北東部との多層的な連結性”



同地方との学術分野での交流の例として、本学が採録。
両学長及びIITG、岐阜大学の学生のコメントを紹介。

2026年8月時点で約234万回視聴※
本学の人材育成の世界的認知度向上に貢献
(※英語版・ヒンディー語版合計)

<https://www.youtube.com/watch?v=YbdWzc3E6-E>

【岐阜大学の特色】

- (1) 日本で唯一、インドとJDPを実施
- (2) 大学の世界展開力強化事業を通じ、インドとの交流拡大・発展中

国際協働教育を持続させるために

11

■ AIやICT, SNS等の活用

■ 異文化理解・体験(先入観や勘違い等をなくす)
百聞は一見にしかず

■ お金がかかる
“Money is not everything, but without money we cannot do anything”

■ 継続可能な交流とは: Who? How?

- Quality vs Quantity vs Capacity
- 信頼関係の構築(協定校との連絡を密に)
- おもてなし? Local hospitality(航空券は参加者負担)

■ 地域との連携

⇒ 国際協働教育は
大学の国際化だけでなく、地域の国際化と人材育成につながる

第4世代大学
としての国際的
プレゼンスを
強化する

国際連携教育に関わる活動・取り組みについて

「海外大学との研究交流SSSVとアカデミックイングリッシュの紹介」

2026年9月3日 日本工学教育協会第74回年次大会
静岡大学 工学部 化学バイオ工学科/国際連携推進機構 副機構長 宮崎さおり

1

SSSV

Short Stay & Short Visit

*工学部の独自のプログラム

3

本日の話題

- SSSV : 学生の国際学術交流
- アカデミックイングリッシュ : 論文・国際研究の基礎
- InSPIRE & ABP : 国際共修と特別教育プログラム
- 学士修士一貫教育と短期留学

2

SSSV (工学部で2011より開始)

SV: 日本人学生の海外派遣

SS: 海外大学からの外国人学生の受け入れ

海外大学研究室との研究学術交流を主目的とした国際交流

学生による英語での研究プレゼンテーションを必須とする

4

年間スケジュール

8月 エ学部内公募 / 採択研究室の決定

10月 事前講習

- ・ 海外渡航安全講習
- ・ 英語でのプレゼンテーションについて
- ・ 異文化コミュニケーションについて

各研究室ごとに海外渡航・研究交流など

1月 成果発表会 ポスタープレゼンテーション

海外大学交流研修I・II(学士),
海外大学交流研修(修士)として単位認定

5

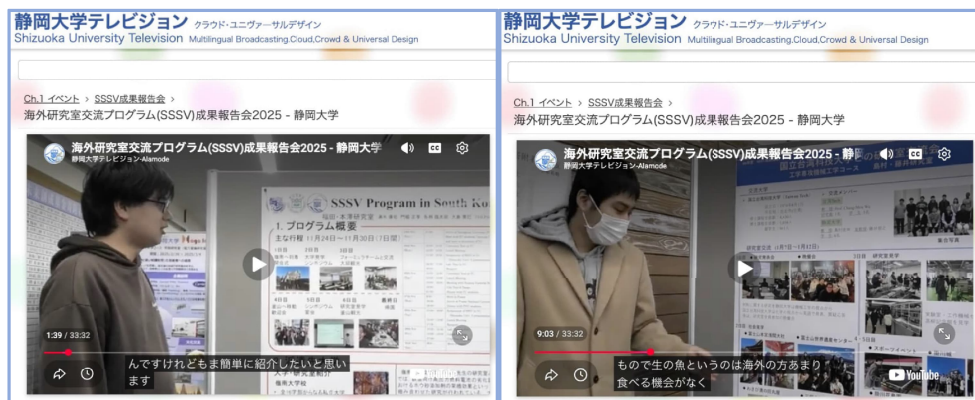
学生の生きた国際研究交流に寄与

- ・ 研究へのモチベーションの向上
世界の中の自分の研究の立ち位置の確認
- ・ 英語力習得への学習意欲の向上
観光や学会参加ではないからこそその密な交流
フレンドリーな環境下での英語による研究発表

7

2025年度の成果発表会

<https://sutv.shizuoka.ac.jp/video/31/3181>



6

静岡大学全体の国際交流へ寄与

派遣先 (2023 ~ 2025年度)	B4	M1	M2	D	学生合計
インドネシア・ガジャマダ大学	0	2	3	0	5
フィリピン大学タクロバン校	0	3	0	1	4
清華大学	3	0	2	0	5
カセサート大学	0	4	1	0	5
ニューヨーク州立大学ビンガムトン校	1	0	2	0	3
国立研究革新庁 ナノテクノロジー・材料研究機関	0	4	1	0	5
釜山大学	0	4	1	0	5
嶺南大学	0	4	1	0	5
チュラロンコン大学	0	0	2	1	3
インド工科大学ハイデラバード校	0	4	7	0	11
国立台湾大学	1	1	1	0	3
国立台湾科技大学	0	0	6	0	6
インド・SRM大学	0	0	3	0	3
ブダペスト工科大学	2	3	1	0	6
国立成功大学	1	2	1	0	4
	8	31	32	2	67

協定校・部局間協定校との交流の推進

世界トップレベルの大学との交流

修士学生派遣への障壁の解決策の一つ
(短期交流の利点)

8

実務的な設計

- SSSV専用のHPを用意
- 募集要項，手続きの共有，簡便化
- 単位認定の仕組み

9

2025年度 募集要項(抜粋)

- 双方の大学の
学生の英語で
の研究会の開
催を必須
- 5日以上のプ
ログラム

プログラムの実施内容

- ・ 研究室レベルでの外国の大学の学生との交流（国際交流による異文化理解）
- ・ 英語による原稿執筆と研究発表、交流先研究室とシンポジウム（英語による研究発表会）を開催
- ・ 静大側学生のための事前研修、および、終了後に参加学生による成果発表会を実施

プログラムの実施形態

1. 海外から受入（SV）：海外の研究室から学生を受け入れ
2. 海外へ派遣（SV）：研究室の静大の学生を海外の研究室に派遣

募集内容

- ・ 実施時期：2026年2月10日まで
- ・ 実施期間：SVは5日以上（移動日を含まず）
- ・ 応募は研究室単位（複数の研究室によるグループでも可）
- ・ 採択数：8研究室程度
- ・ 学生数：一応募あたり原則3～5名
- ・ 派遣対象学生：研究室配属されている学部4年生および修士学生（創造大学院博士課程学生を含んでよい）
- ・ 交流先：応募時に交流先の承諾は必須ではない。日程と交流先の提示で応募可能。

支援内容

- ・ 学生旅費：一応募あたり最大60万円まで支給。学生1名当たりの支援額は最大15万円。
- ・ 教員旅費：一応募あたり教員1名分を支援する。本事業に新規参入の研究室、あるいは、新規交流先での実施の場合、教員1名あたり最大15万円、それ以外では教員1名あたり最大8万円。
- ・ 上記支援上限の増額については交流先により調整可（要相談）

採択について

- ・ 応募が多数の場合、次の順で優先して採択します。①新規参入研究室、②交流先がインド国内の大学(*1)、③グタベスト工科大学(*2)、④その他。また、抽選を行う場合があります

(*1：グローバルサウスにおける交流・連携に向け、今後の連携強化が望まれる)

(*2：スズキ財団の研究者招聘支援の対象校であり、今後の連携強化が望まれる)

11

SSSVの手続きについて

1. 一般情報・最新ニュース
2. 教員向け(派遣・受け入れ)
3. 学生向け(派遣・受け入れ)

で構成されています。関係のセクションをご覧ください。

(右下のナビゲーションをご利用ください。)

2025年8月8日

2025年度募集を開始いたします。8月26日(火)締め切りです。
応募は、応募フォームよりお願いいたします。

2025年度、海外研究学生との交流促進に関する募集要項について、2025年7月10日（水）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。2025年度募集要項は、2025年8月8日（金）に「2025年度募集要項」を公表いたしました。

10

アカデミックイングリッシュ

12

アカデミックイングリッシュ

- ・ 教養共通科目・工学部で必修
- ・ 学科に1名以上在籍する外国人教員の活躍
- ・ 学術論文の読解・英語でのプレゼンに特化

13

学術論文の発表の仕組み・論文の構造
Abstractの構造・英語での発表など, etc.

Reading I – V

Writing & presentation I - V

Student presentation in English

15

工学部化学バイオ工学科での例
担当: 私とフェリ先生(外国人教員)
学士2年前期の授業

回	授業日	タイトル	担当	授業中のactivity, discussion	activity 形態	課題Assignments
1	2026/4/17	授業ガイダンス・Practical Englishの使い方・出席課題について、最終プレゼンテーションについて	宮崎	グループを作り、グループkeywordを決める	グループ	
2	2026/4/24	AE-Reading 1: 科学論文の仕組み(科学雑誌と論文の仕組みと選び方), selecting paper	宮崎	各人2つ論文を探し、自分の論文候補を決める	各自	2つの論文のURLとタイトル・Abstract提出 4/30日 8:00pmまで
3	2026/5/1	AE-Reading 2: 科学論文の読み方 (Summary & Introduction)	宮崎	自分の論文をグループに紹介し、重ならないように自分の論文を決める	グループ	各自の論文の主題・Fig1・Fig2について読みとる 5/14日 8:00pmまで
4	2026/5/8	AE-Reading 3: 科学論文の読み方 (Figures & Figure legend)	宮崎	Summary, Introduction, Figsを読み取る。	各自	
5	2026/5/15	AE-Presentation-1: From paper to presentation	Ferri	Differences between paper and presentation.		
6	2026/5/22	Group activity, reading.	宮崎	論文を読む・その後、グループごとに進捗を共有 グループの主題を決める。どのようにグループプレゼンテーションを作るか決める。発表日決め、グループイントロ、グループConcの説明	各自・グループ	Discussion課題: 自分が以外の3人の論文の主題を記載し、かつ、1人分につき2行以上。英語で記載のこと。更に、最終プレゼンのグループでのテーマを最終決定して記載する。 5/28日 8:00 pmまで
7	2026/5/29	AE-Writing-1: Summarizing a paper	Ferri	Selecting important information from paper.		Write an English summary of your paper, in your own words (100-150 words) by June 4 (8PM).
8	2026/6/5	AE-Presentation-2: Preparing effective slides.	Ferri	How to make effective slides that can be quickly and clearly understood.		Prepare 2-4 slides for your presentation by June 11 (8PM).
9	2026/6/12	AE-Presentation-3: How to present	Ferri	How to give a good presentation.		
10	2026/6/19	Group discussion & Merge slides	Ferri	Start combining each presentation into one		
11	2026/6/26	Oral presentation A	Ferri & 宮崎	12 min presentation/ group x 7 (4 persons/group)		B, C, D がAについて評価 7/28日 8:00pmまで
12	2026/7/3	Oral presentation B	Ferri & 宮崎	12 min presentation/ group x 7 (4 persons/group)		A, C, DがBについて評価 7/28日 8:00pmまで
13	2026/7/10	Oral presentation C	Ferri & 宮崎	12 min presentation/ group x 7 (4 persons/group)		A, B, DがCについて評価 7/28日 8:00pmまで
14	2026/7/24	Oral presentation D	Ferri & 宮崎	12 min presentation/ group x 7 (4 persons/group)		A, B, CがDについて評価 7/28日 8:00pmまで
15		Practical English(オンデマンド課題)	宮崎		各自	

14

学生自らの学びを後押しできる様な
仕組みの構築

1. 自分で選んだ英語論文を読む

2. 1人一報を読むがグループで発表
する

16

学生の選ぶKeyword例

- Biomimetics
- Plastic
- Drug discovery
- Muscle
- Skin regeneration
- ...

17

静大の国際化への取り組みと工学部の役割

- InSPIRE/ABP特別教育プログラム
- 学士・修士一貫教育（半年の留学を想定）

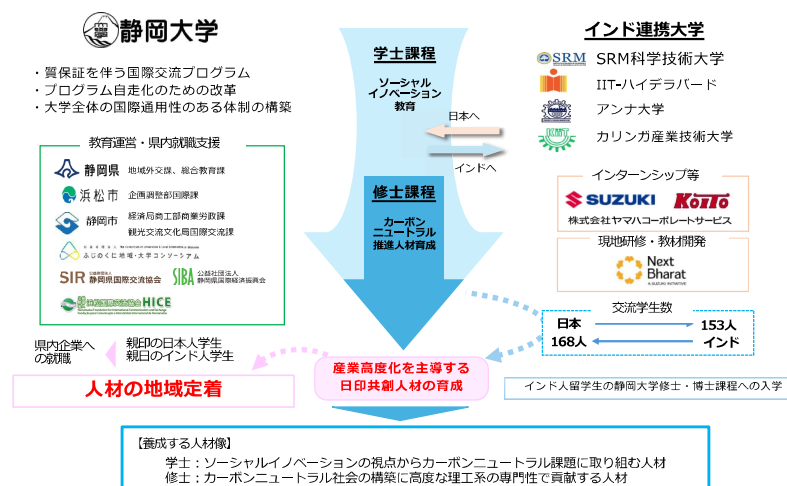
19

機械工学科の例

グループごとに分かれて、各教員の研究室にてゼミ形式で論文を読む

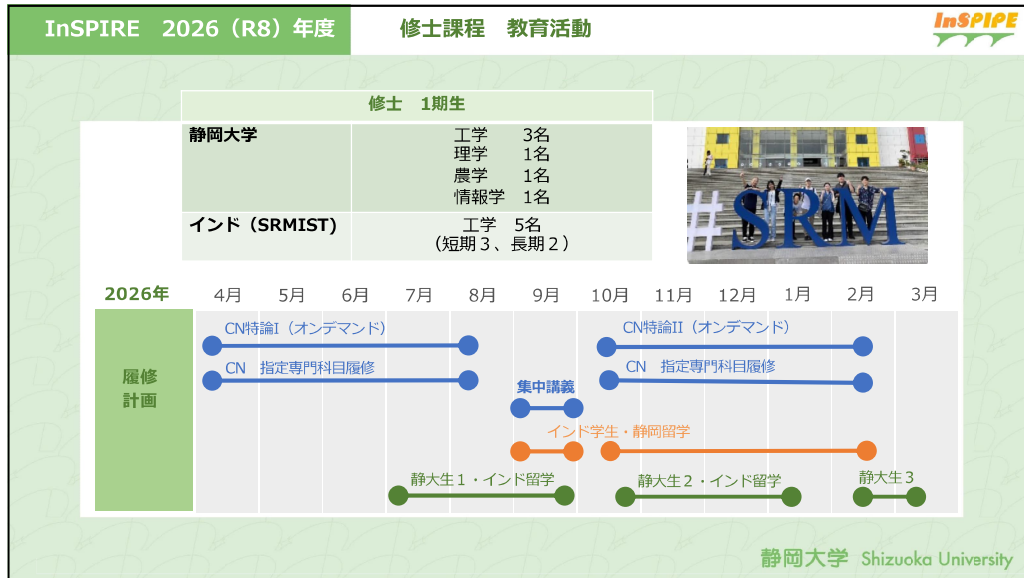
18

InSPIRE 産業高度化を主導する日印共創人材育成



provided by Ryan Y

20



21

ご清聴ありがとうございました。

本日の話題

- SSSV : 学生の国際学術交流
- アカデミックイングリッシュ : 論文・国際研究の基礎
- InSPIRE & ABP : 国際共修と特別教育プログラム
- 学士修士一貫教育と短期留学

23

工学部の企業連携力・研究力・新規参入力が生み出す国際化

NIFEE (工学部独自の留学生受け入れ)

→

ABP (Asia Bridge Program)

浜松市・企業との連携

インド大学との連携

→

InSPIRE

22

豊田工業大学 ダブル・ディグリー制度の現状と展望

日本工学教育協会第74回年次大会（2026.9.2～4）

豊田工業大学 教授 吉村雅満



1

ダブル・ディグリー（DD）制度の概要と歩み

本学と海外協定校の双方で修学し、両大学の修士学位を取得する制度

2009年～ 国立中興大学（台湾）、ハンナム大学（韓国）と協定締結

2010年～ DD受入学生に対する経済支援制度を決定
海外からの留学生（受入）実績の蓄積

現在 本学学生からの「海外派遣」ニーズが顕在化
双方向の制度運用に向けた整備フェーズへ

文部科学省：組織的な大学院教育改革推進プログラム「実学の積極的導入による先端的工学教育」（2008-2010）

3

豊田工業大学の概要と特色

設立背景

トヨタ自動車の社会
貢献事業として設立

建学の理念：
「研究と創造に心を致し、
常に時流に先んずべし」

育成目標

豊かな人間性と
創造的な知性

実践的な次世代国際
産業リーダーの育成

教育体制

1法人・1大学・1学部・
1大学院（修士・博士後
期）の少人数教育

学部定員100名、修士定
員50名、博士定員12名
産業界との強力な連携
（学外実習等）

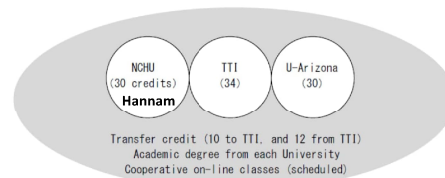
2

Double Degree Program

Agreement

(2007.7): National Chung Hsing University, Taiwan
(2008.5): University of Arizona, USA (Expired)
(2010.11): Hannam University, Korea

Program Details



更新日時	2026/03/07 9:46:03
年度	2026
講義名称	Introduction to Energy Conversion
開講責任部署	大学院工学研究科修士課程 先端工学専攻
講義区分	講義
基準単位数	1.0
講義履修時期	前期
実務経験	実務経験のある教員が担当
科目区分	専門科目/修士専門科目
ナンバリングコード/分野	ナンバリングコードX147
英文科目名	Introduction to Energy Conversion
開講学期	学部：7学期/修士：前期

担当教員	氏名
教員職員	中興大学
教員職員	○ 吉村 雅満
教員職員	佐々木 実
教員職員	松波 雅治

授業の目的・方針	① This course will introduce the basics of energy conversion in thermoelectric materials, energy systems and MEMS. ② This course will expose students to the English vocabulary, pronunciation and communication.
授業の達成目標	① To understand the basics of energy conversion in thermoelectric materials, energy systems and MEMS. ② To improve vocabulary, pronunciation and communication skills.

4

留学生（受入）の状況

5

制度運用における現状の課題

制度・システム面の課題	・受入のみの実績であり、派遣用の実務フローが未整備 ・各校の基準すり合わせ（特別研究や必修科目の単位互換ルールの複雑さ） ＋学期タイミングのズレ
実務・サポート面の課題	・専門的な語学能力（英語(TOEIC600)、日本語(JLPT N2))の確実な担保 2027年入試から ・渡航先での生活立ち上げや、近年の物価高騰に対する経済支援の不足 寮費は自費、奨学金

7

DD制度におけるこれまでの受入実績

近年の受入実績

年度	研究テーマ
2023	両極性電圧駆動を用いた静電マイクロアクチュエータの精密変位制御
2023	太陽電池の高効率化を目指したダウンコンバージョン用Mn2+ドープCsPbCl3ナノ結晶の合成に関する研究
2025	パラフィンを用いた化学気相成長グラフェンの転写

研究分野

- ・制御システム分野：ロボティクス、自動運転、パワーエレクトロニクス等の先端研究
- ・電子情報分野：AI、IoT、通信ネットワーク、半導体デバイス等の基盤技術研究

留学生の声（概要）

- ・英語でのコミュニケーションと手厚いサポート体制
- ・安心して研究に専念できる環境
- ・グローバルエンジニアとしての基盤を構築

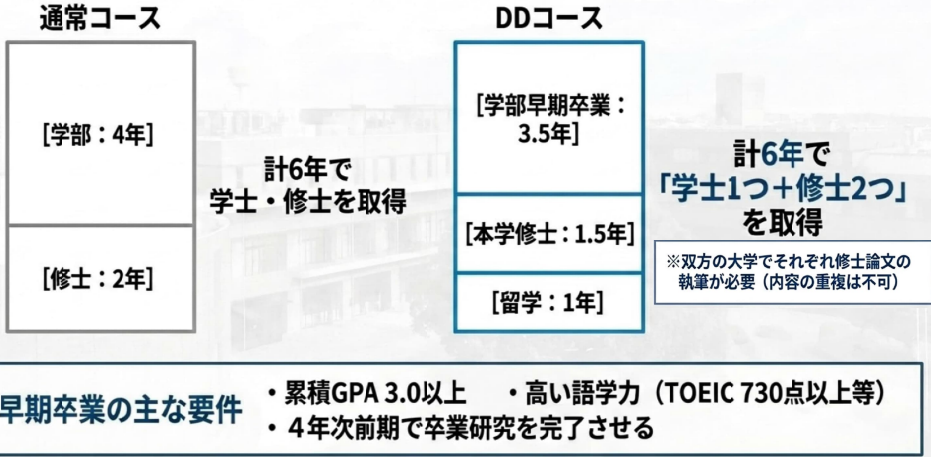
2009 (2), 2010 (1), 2011 (2), 2012 (4), 2013 (1), 2014 (1), **2015 (0)**, 2016 (5), 2017 (5)
2018 (3), 2019 (0), 2020 (1), 2021 (1), **2022 (0)**, 2023 (2), 2025 (1), 2026 (1) **合計30名**

6

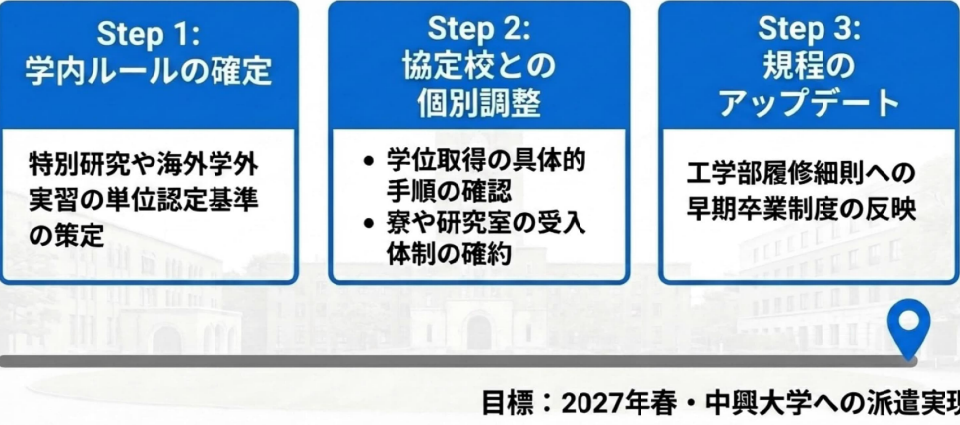
本学学生（派遣）の状況

8

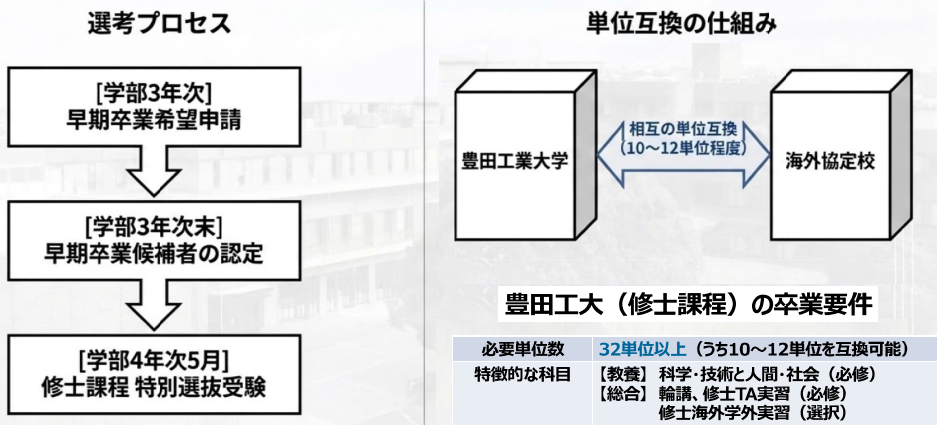
DD学位取得に必要な在籍年数および要件



初のDD「派遣」に向けたプロセス構築



選考プロセスと単位互換の仕組み



時期		学部		修士		履修シミュレーション(案)	手続き・学籍関連
		TTI	NCHU	TTI	NCHU		
3年次	'25	後期	6学期				・早期卒業制度の利用申請提出 ・ブレ配属開始
	4年次	前期	7学期			・卒業研究1・2 同時履修 ・修士科目の履修(4単位)	・特別選抜を受験・合格 ・前期末卒業(卒研発表)
		後期				・特別研究1 ・セミナー1(後期) ・科学技術英語2 ・科学・技術と人間・社会 ・修士TA実習1(後期) 他講義科目履修(～前期)14単位分	・修士入学
5年次	'26					・セミナー2(前期) ・科学技術英語1 ・修士TA実習2(前期) ・輪講	・フィードバック調査実施・報告書提出 ・中間発表代替レポート提出 ・「特別研究1」単位認定
	'27	前期				・NCHU卒業要件31単位 (内12単位はTTI履修18単位を 12単位に圧縮して単位認定)	留学開始(第1学期から) 第1学期:8月～1月 第2学期:2月～7月
	8年次	前期				・特別研究2 ・NCHU取得単位を本学に互換 (必要あれば)	・前期～「特別研究2」履修開始 TTIとNCHUの学位を取得

◆（参考）各大学の修了要件と単位互換のイメージ

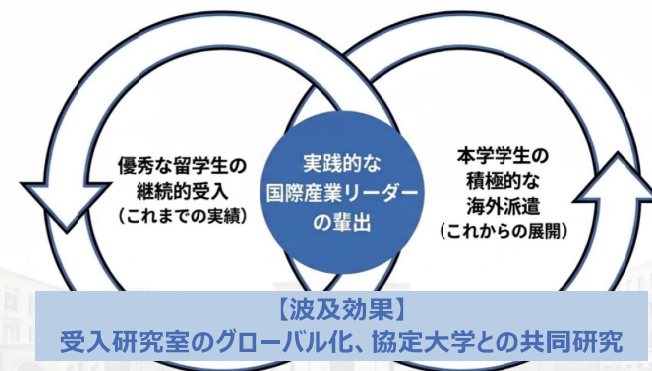
本学 18 単位を NCHU12 単位に圧縮して単位互換する。（この単位互換は必須ではないが、NCHU での履修負担を減らすためには本制度利用を推奨）。NCHU 取得単位を本学へ単位互換する際は上記 1. のルールに基づき単位互換する。

	中興大学(NCHU)	TTI
修了要件 (単位数) (※)必修	セミナー 1 単位(※) 修論 6 単位(※) 講義科目 24 単位(内 6 単位必修) 計 31 単位	セミナー 2 単位(※) 修論 8 単位(特別研究 1・2)(※) 英語 2 単位(※) 高教養 1 単位(※) 総合科目 3 単位(※) 講義科目 14 単位以上(内 12 単位必修) 計 32 単位以上
・1/3(11 単位)以上をNCHU で取得すること ・TTI→NCHU への単位互換:12 単位まで可 ・コアコース(選択必修科目)6 単位履修必須		・NCHU→TTI への単位互換:10 単位まで可
科目群	単位	取得大学
セミナー	1 単位	NCHU
修論	6 単位	NCHU
講義	12 単位	NCHU
計	31 単位	
	12 単位	TTI
	18 単位	TTI
	34 単位	TTI
	計	

授業時間の関係で本学 18 単位を 12 単位に圧縮

(修論) 双方の大学で1本ずつの修士論文執筆が必要。内容の重複は不可。

DD制度の展望：双方向のグローバル交流へ



受入フェーズから、真の「双方向」運用フェーズへ移行。
制度の継続的なアップデートを通じ、本学のグローバル技術者育成を加速させる。

DD派遣学生への経済支援制度の見直し

近年の渡航費・滞在費高騰（年間約45万円予測）に対応するため、豊田奨学基金を活用した支援を拡充。

	2010年決定内容	見直し案
基本渡航費	40万円	50万円
追加支援（住居・家財）	10万円（国内住居確保）	10万円 （家財保管・運搬目的を追加）
合計給付額	最大50万円	最大60万円

ご静聴有り難うございました。

高専のグローバル事業を活用した学生教育とその効果

岐阜工業高等専門学校 電気情報工学科 田島 孝治

1. はじめに

本稿では岐阜工業高等専門学校（岐阜高専）におけるグローバル教育・国際交流事業を活用した学生教育活動とその効果について報告する。岐阜高専のグローバル教育の特色は、海外派遣だけでなく、短期留学生の受け入れ、研究室での協働、英語教育および学内交流を相互に関連付け、日常的な教育活動の中に国際性を組み込んでいる点にある。

岐阜高専は、平成23（2011）年に、インドネシア・バンドン工科大学と包括交流協定を結び、これを活用する形で相互の短期留学プログラムを開始した。その後もフランス、英国、ベトナム、シンガポールなどに協定校を拡大しながら学生の交流や共同研究に取り組み、学生教育へ活用してきている。さらに、平成28（2016）年度から、（独）国立高専機構のグローバル高専事業に採択され、学年に応じた国内外で行われる研修プログラムを実施し、グローバルな視点で問題解決に取り組めるエンジニアの育成を目標に活動している。

2. 岐阜高専のグローバル教育プログラム

2. 1 学生への英語教育での工夫

岐阜高専へ入学してくる学生たちは、中学校を卒業した15歳という年齢であり、専門科目と一般科目の双方について、基礎を形成する段階にある。特に、工学分野、なかでも数学、理科への興味から高専へ入学する学生は多く、英語は入試科目ではあるものの、英語に対する関心が必ずしも高くない学生も多い。

こうした学生の傾向を踏まえ、本校では、専門分野を通じて英語への関心を高める次の取り組みを行っている。

（1）理工学系の内容（英語による数学の問題の解き方や概念、航空宇宙やコンピュータなど技術的なトピック）を本文に取り入れた教科書を開発し、活用する。

（2）Web教材を用いた自学自習と、少人数による対面学習を一つの授業の中で組み合わせる。

また、低学年の段階からTOEICスコアを意識した学習を促し、TOEICスコアに応じた単位認定やポイントシステムを取り入れている。

2. 2 協定校の短期留学生受け入れによる協働教育

現在、岐阜高専は海外の高等教育機関17校と包括協定を結び、1か月から3か月程度の期間で海外協定校から短期留学生を受け入れている。短期留学生は自分の専門分野の研究室で、指導教員と共に研究活動に取り組む。研究テーマは指導教員が与える場合や、協定校の指導教員と共に検討する場合がある。

短期留学生との協働を通じたグローバル教育は大きく分けて三つある。一つ目は、研究室での共同研究である。短期留学生を研究室に受け入れ、本校学生と共に研究活動に取り組む機会を設けている。留学生との交流は受け入れ研究室で行われ、その指導およびコミュニケーションは英語が主体となる。このため、研究室内では、学生

が日常的に英語を使用し、異なる文化的背景を持つ学生同士が協働する環境が形成される。これにより、本校学生は専門知識を用いて英語で意思疎通する経験を得るとともに、異なる文化的背景を持つ学生との協働能力を身に付ける。

二つ目は学内コンテストや実験への参加である。実験内容は学科ごとに異なるが、電気情報工学科では3年生の実験の選択テーマとして「グローバルな視点で社会や技術について議論する」という内容を用意しており、学生4～5名のグループに海外からの短期留学生1名を加え、エネルギー、環境、AIの活用などをテーマとして英語で議論し、その成果を英語で発表する実験テーマを設けている。また、AIモデルを作成するコンテストを学内で実施し、短期留学生にも参加してもらうなどの取り組みを行っている。専門分野について議論することで、国や文化が異なっても、共通している考え方や、全く異なる考え方を知ることが目的として実施している。

三つ目は課外のコミュニケーション活動である。学生会（生徒会）や寮生会（寮生のみで構成される、学寮の学生指導やイベント企画を行う団体）が主体となって実施する歓送迎会に加え、茶道や書道、和食づくりなどを通じた留学生と本校学生が共に日本文化を体験する活動、気軽に参加できるボードゲーム会などがある。低学年の学生が英語しか話せない留学生と初めて話すためのきっかけ作りとなっている。

2. 3 学生の海外派遣プログラム

学生の海外派遣については、学年や学習段階に応じた複数のプログラムを実施している。当初、学生の派遣は専攻科生の協定校への派遣から始まった。1か月程度の研究活動により卒業に必要な単位が与えられるだけでなく、渡航費および滞在費の一部については、本校の教育基金や（独）日本学生支援機構の海外留学支援制度を活用し、おおむね航空券代に相当する額の補助を受けることができる。現地の学生寮を使うことで金銭的な負担が少なく、現在は年間10名程度を継続的に派遣している。



図1 短期留学生との交流プログラム

低学年の派遣に関しては、低学年から参加できる段階的な研修プログラムとして、「海外研修I」「海外研修II」「海外研修III」を設けている。台湾・新竹、シンガポール、米国・シアトル、フィリピンなどを行先とし、渡航先や内容は国際事情に応じて変更している。

これ以外にも、海外の高専で開催されるロボコンや語学研修などでの渡航に関しても高専のグローバル事業からの補助がある。これらを合わせると、1年間に全学生の約15%に当たる150名以上が海外に渡航している。

2. 4 国内で実施する英語・異文化交流プログラム

金銭的な問題や時間的な問題で海外渡航は難しい学生でも参加できるように、外国人教員による放課後英会話レッスンに加え、ネイティブスピーカーの講師や日本国内の大学に在籍する外国人大学院生招き、3日間程度の英語研修を実施している。これまでは学内で実施してきたが、本年度は会場をびわ湖青少年の家に移した。

3. グローバル活動を経た学生の成長

3. 1 学生の英語力の変化

本校の学生の英語力について客観的な指標となるのは、第3学年/第4学年修了時の学生および専攻科生全員を対象として実施しているTOEICのスコア集計である。図2に、本校学生の平均スコアと、「TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2026」に掲載された対応する学年の平均スコアとの比較を示す。2022年度以降テスト対象の学年が第4学年となったため、参考とする平均値も大学1年生の値を利用した。高専全体の学生の平均スコアについては、高等学校の生徒と比較して低い傾向があり、本校も短期留学生の交流などを開始する前は、第3学年修了時のスコアが360点程度であった。専攻科生のスコアは、専攻科の短期留学プログラム開始から2～3年後に上昇した。また、第3、4学年のスコアについても、留学プログラム開始から2～3年後に上昇傾向が見られた。

これはプログラム実施の定着に合わせる形で、プログラムへの参加をモチベーションとして学習する学生が増えたためではないかと考えられる。特に留学プログラムを拡大した2021年以降は、入学希望者に対して海外留学の機会を積極的に紹介していることもあり、入学時点から海外留学を目標にしている学生も増えている。

3. 2 異文化理解と国際的活動への意欲の変化

TOEICスコアでは捉えにくい学生の意識や行動の

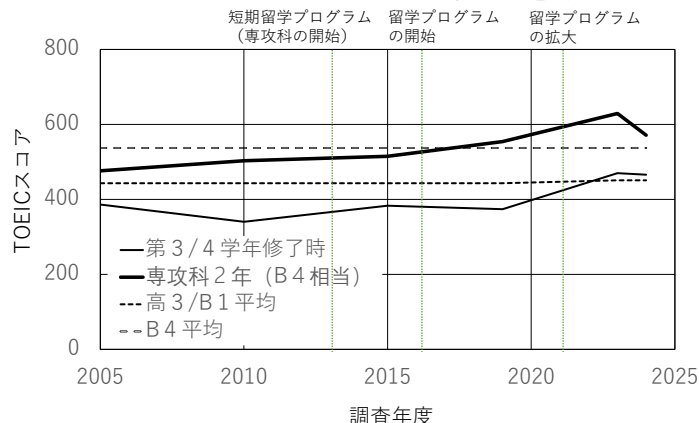


図2 本校学生のTOEICスコアの推移

変化を把握するため、卒業生および在校生のプログラム参加者にインタビューを行った。かぎ括弧内は、卒業生本人の発言を要約したものである。

2014年に本校に入学し、2019年に専攻科生向け海外短期留学プログラムに参加し、米国のアイオワ大学で1か月間学んだ学生を紹介する。彼は、5年生のころから研究室における留学生の受け入れや交流に積極的に関わっていたが、「英会話について自信はなかった。行ってみて話してみたら、意外と何とかなることが分かった。伝えようと思う気持ちが大切だった。留学経験は、その後の大学院進学や就職を決める際にも大きく影響した。」と語っている。大学院では、周囲に外国人学生がおり、英語による授業が実施される環境へ飛び込み、中東で研究の国際発表を行い、現在では、外資系情報関連会社のサービスエンジニアとして、海外の顧客を担当する業務にも、臆することなく取り組んでいる。

2018年に入学した別の学生は、低学年向け海外研修である米国・シアトル研修に第1学年時に参加した。専攻科在籍時には、シンガポールで1か月間の研修、その後はベトナムで行われる国際ロボコンに2度も参加するなど継続的に国際活動へ取り組んだ。彼は「ステレオタイプを捨ててきっかけになった。アメリカのホストファミリーはアジア系であった。ホストファミリーとたくさん話して、アジアにルーツを持つ人々が米国で生活し、活躍することの難しさや挑戦を肌で感じることもできた。」と語り、低学年でのこの経験は、その後の短期留学生の生活をサポートするボランティア活動につながった。「留学生との距離が極めて近いということが高専の留学生受け入れの特徴」とも述べており、シンガポールやベトナムへの渡航については、「友達が生活している国を見てみたい」という思いが大きな動機になったという。彼と活動を共にした友人2名も、現在、情報分野の専門家として海外で勤務している。この事例からは、学生同士が国際的な活動への関心を共有し、相互に刺激を与えていた様子がうかがえる。また、本人は海外での仕事も見た上で、「日本での暮らしは最も優れている。日本で海外の仕事を受けることができるのがベスト」という結論に至り、現在は国内企業でインフラエンジニアとして勤務し、海外出張を含む国際的な業務にも携わっている。

4. まとめ

本稿では、岐阜高専におけるグローバル教育プログラムの展開状況と、それに伴う学生の英語力および意識・行動の変化について報告した。グローバル教育事業の展開と並行して、学生のTOEIC平均スコアには上昇傾向が見られた。海外研修を通じて培われた異文化理解やコミュニケーションへの自信は、短期留学生を支援するボランティア活動への参加や、研究室における留学生との協働、研究活動のモチベーション向上にもつながっている。本年度から新たなプログラムもスタートしたため、学生へのアンケートやインタビューを継続的に実施し、プログラムが学生の英語力、意識、行動および進路選択に与える影響を検証していく予定である。